広告　企画・制作／読売新聞社広告局

公益財団法人SGH財団　第17回市民公開講座

がんとともに生きる

～患者に寄り添う医療とは？～

公益財団法人SGH財団主催の第17回市民公開講座「がんとともに生きる～患者に寄り添う医療とは？～」が2月24日、グランフロント大阪・ナレッジキャピタルで開かれました。身近な人をがんで亡くしながら、医師として、支援者として、患者やその家族と向き合う2人の講演に、約900人の来場者は耳を傾けました。

あいさつ

公益財団法人ＳＧＨ財団理事長
ＳＧホールディングス株式会社代表取締役会長
佐川急便株式会社会長
栗和田 榮一 氏

「がん」医療学ぶ機会

当財団のがん研究振興事業は、1989年の「佐川がん研究振興財団」設立により始まりました。市民公開講座は、市民の方々にがんへの理解と最新の医療を学んでいただく啓発活動として、年１回開催しています。財団設立当時、がんは不治の病といわれていましたが、医療の進化により、「向き合いながら、ともに生きる」時代に変化してきました。市民講座を、今や身近な病気と言える「がん」の医療について考える機会にしていただきたいと思います。

講演に熱心に耳を傾ける来場者

講演１

「人はがんとどう向き合うか？」

国立がんセンター名誉総長
公益財団法人日本対がん協会会長
公益財団法人ＳＧＨ財団顧問
垣添 忠生 氏

体の異変 すぐに受診を

かきぞえ・ただお　1941年、大阪府生まれ。東京大学医学部助手などを経て国立がんセンター病院勤務。手術部長、院長、総長、名誉総長を歴任。2007年３月から現職。がんの診断、治療、予防に幅広く関わり、がん検診や緩和医療への関心も高い。

■情報集めて考えて

２人に一人ががんになるといわれており、誰にとっても無縁ではありません。20～30年間の基礎研究で、がんは遺伝子の異常によって発生する細胞の病気だとわかってきました。長い時間をかけて発生・進展するので、心筋梗塞や脳梗塞のように、１分１秒を争う救急対応が必要な病気とは性質が異なります。みなさんやご家族ががんと診断された場合、どのような対処をするべきか、情報を集めて考える時間は十分にあります。

人は非常に多様で複雑な存在です。「受診の時期」を例に２人の患者さんを紹介します。まず１人目は、わずかな聴力異常に気付いた患者さんです。仕事中、いつも左耳で取っていた電話の受話器を右耳で取っていることに気付き、聴力の低下を疑って病院へ行きました。すると、非常に早い段階の聴神経腫瘍が見つかり、すぐに治療して社会復帰されました。

もう一人は、精巣の肥大に気付いていながら、羞恥心や恐怖心からなかなか受診しなかった精巣がんの患者さんです。首と腹部にも巨大な腫瘍ができ、首が回らない、あおむけに休めないほどでした。検査をすると肺にも転移している状態で、一昔前なら3、4か月で亡くなっていたと思います。若くて体力のある方だったこともあり、苦しい治療や大手術に耐え抜いてくれました。２人は性質の異なるがんですが、「自分の体の異常にどう対処するか」という点で、天と地ほどの違いがあったと強い印象をもって記憶しています。

■一人ひとり違うとらえ方

同じ前立腺がんの「手術」に関して、「性機能を失うなら受けない」と言う人、経過観察でも天寿を全うできるとお伝えしても、「見つかったなら必ず手術してほしい」と言う人。「告知」を受け、内視鏡ですぐに切除できる早期の小さながんでも、病名を聞いただけで失神してしまった人、複数の転移を告げられても顔色一つ変えずに淡々と化学療法を受けた人――。わずかな例ですが、人によってがんの考え方やとらえ方に違いがあるのです。人間の強さ、弱さすべてを受け入れてこそ医療です。

先ほどの、淡々と化学療法を受けた患者とは、11年前に亡くした私の妻のことです。彼女は「家で死にたい」と強く願い、最期は家で過ごすことにしました。病院には外泊届を出していましたが、私たちは「死ぬために帰る」という感覚です。「家でクエ鍋が食べたい」と言っていたので、私が作りましたが、強い口内炎と食道炎で全然食べられないのではと思っていました。

しかし、これは「在宅の奇跡」でしょうか。妻は大きい茶わんに２杯もおかわりをし、辺りを見渡しては「家はこうでなくちゃ」と、満足そうにしているのです。環境を整えるのに苦労しましたが、連れて帰ってきて本当によかったと思いました。翌日から妻の意識は途切れ途切れになり、帰宅から4日目は朝から昏睡状態でした。午後には激しい呼吸困難になり、処置を施しても全く治まらないのです。

ところが夕方、それまで完全に意識がなかった彼女が突然、半身を起こしました。そして私の顔をしっかり見つめ、手をぎゅっと握ったのです。それからすぐに、心肺停止に陥りました。意識がないまま亡くなっても不思議でない状態でしたが、最期の最期に、「ありがとう」と伝えてくれた気がしました。その後、私は大変つらい時期を過ごしましたが、なんとか耐えられたのは、この「心の会話」があったからではないかと思います。

がんも人も、本当に様々です。私たちは、この組み合わせの限りない多様性を頭に置き、患者や家族と向き合わなければなりません。私自身もがんを経験しており、臨床医、基礎研究者、患者の家族、遺族というあらゆる局面に立ち会ってきました。今後のがん対策に生かすべく、がん検診の受診率向上、患者や家族の支援、在宅医療や在宅死を望む方へのサポート、遺族のグリーフケアなどに携わってまいりたいと思っています。

講演２

「がんとともに歩む人を支えて～マギーズ東京の試み～」

認定ＮＰＯ法人マギーズ東京共同代表理事
マギーズ東京センター長
秋山 正子 氏

患者が思い語る場所に

あきやま・まさこ　秋田県生まれ、聖路加看護大学卒業。助産師、保健師、看護師。1992年から東京都新宿区で訪問看護を開始。2016年、東京・豊洲にがん患者の相談支援の場「マギーズ東京」を開設し、センター長に就任。

■患者と家族のための施設

「マギーズ東京」は、がん患者と家族のための相談支援センターとして、2016年10月、東京都江東区豊洲に開設されました。英国発祥のマギーセンターは、がん経験者・マギーさんの「病人ではなく一人の人間に戻れる小さな家庭的な居場所がほしい」との思いから、1996年にスコットランドの首都・エディンバラに誕生したケアリングセンターです。

がんはいまや慢性の病気です。診断されてから約6割の方が10年は生きる、「ともに生きる時代」になりました。しかも、外来が中心の治療です。すると医療者と接する時間が少なくなり、相談する間もなく思い悩んでいるうちに診療時間が終わってしまいます。人とゆっくり話をしたり、不安を吐き出したりする機会がなく、心配を掛けたくないと家族にも話せず一人で抱え込み、ありのままを出せる場所がないのです。病院にも相談支援センターがありますが、予約が必要であったり、時間に制限があったりして、なかなかそこへたどり着けないのが現状です。がんの影響を受けている人には、自分の気持ちや思いに気付くことができ、がん以外のことや、人生で何が大切かを考えられる、家でも病院でもない「第三の場所」が必要なのです。

■30人以上の専門職員

マギーズ東京は、心の中にある「語りたいこと」を語りたいタイミングで語れる場所です。予約も利用料も必要ありません。看護師、心理療法士など4人が常勤しており、非常勤やボランティアも含めると約30人以上の専門職スタッフが、患者に寄り添い、耳を傾けます。この時、こちらから情報提供や示唆することなく、友人同士のような普通の会話、雑談の中から「本人が自分の強さに気付き、一緒に考えていく」ことを大事にしています。それぞれが語りを通して、がんという経験を振り返り、日常生活を大事にしながら自分で考え新たな生き方を模索し始める。そんな場所が病院以外にも必要だというのが、開設から2年たっての実感です。

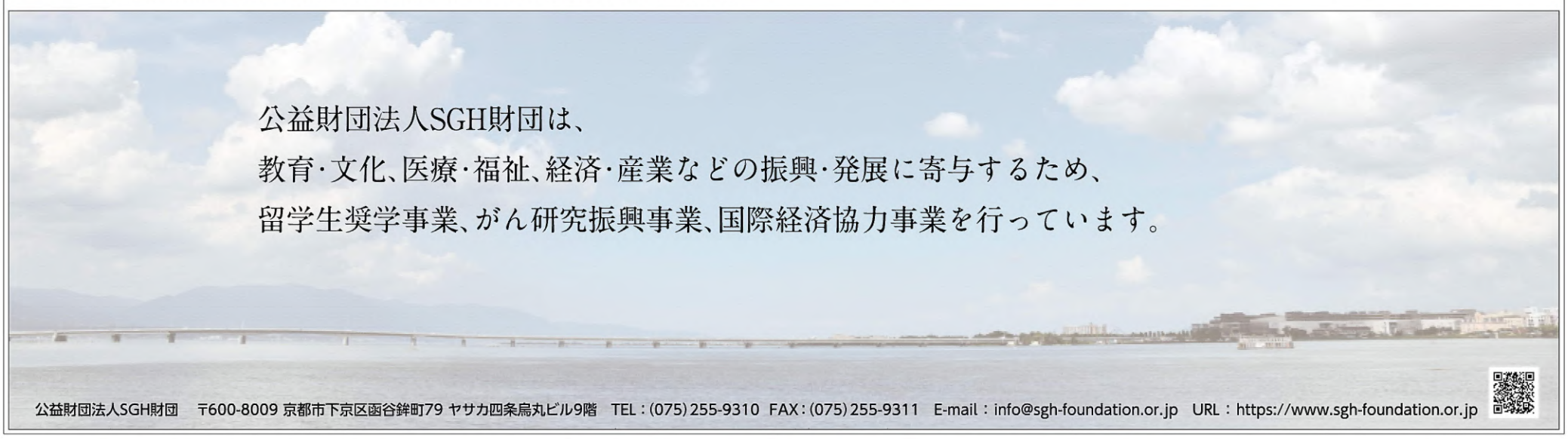
マギーズには、大切にしている三つのキーワードがあります。お互いに気遣いながら行う「Ｃａｒｉｎｇ」、思いを共有する「Ｓｈａｒｉｎｇ」、そして、勇気を持って一歩を踏み出す「Ｄａｒｉｎｇ」です。いろいろな個性を生かし、歩み続ける勇気を奮って、分かち合いながらケアをする。特に大事なのは「死の恐怖の中にあっても生きる喜びを失わないこと」。これはマギーさんの言葉です。

私は訪問看護を始めて四半世紀になります。訪問看護は究極の個別ケアですが、その個人から家族のケア、地域とのつながりも大事にしてきました。予防から看取りまで、さらにそこから発展する新たな相談支援も、がんとともに歩む方々を支える活動の一環と考えています。マギーズは多くの方の協力を得て行っていますので、他の地域にも広がることを望んでいます。

閉会のあいさつ

コーディネーター
公益財団法人ＳＧＨ財団理事
日本赤十字社和歌山医療センター院長　**平岡 真寛 氏**

市民公開講座 今後も展開

今回は「がんとともに生きる」をテーマに掲げ、この分野をリードする２人の先生をお招きしました。垣添先生には、人やがんの多様性に対応するには、医療従事者だけでなく、家族や社会も患者に向き合うことの重要性を教えていただきました。奥さまは幸せな人生だったのではないでしょうか。私は現在、病院の管理者をしており、院内で多様ながん患者のニーズに応える体制作りを進めています。病院だけでは対応できないことがたくさんあるということを、秋山先生に気付かせていただきました。

ＳＧＨ財団は今後も引き続き、市民公開講座を行いますので、よろしくお願い致します。